柳田國男の『火の昔』

■先人の苦労や工夫を知り、火の今を考える（下）■

なら民俗通信 259

武智　功

異界感じる灯火の工夫

▼蝋燭の代わりの灯火器

柳田の著書『火の昔』によれば、盆に祖先を迎える燈籠木（高燈籠）は「もとは盆の月のついたちに立て、それから七月の月いっぱい、毎夜火をともすのが普通」であったという。

しかし、長期間に渡って貴重品であった蝋燭（ロウソク）を燈籠に点（とも）すことは、費用の面で大変であった。それゆえ蝋燭の代わりに油を使う工夫がされ、「ここにまた一つの発明が起こったという。盆燈籠の中で菜種（なたね）油を点すための灯火器である。

この灯火器は一般的に「燈蓋（とうがい）」と言われたようだが、「タンコロ」や「ヒョウソク」とも言われていた。

盆燈籠や大きな提灯（ちょうちん）の中で使われた燈蓋は、「深い口のつぼんだ形にして、まん中に燈心をさす細い筒を立て、おまけに二寸ばかりの台をつけた…その台の底には穴があいていて、それを燈籠に打ちつけてある釘にさして、ロウソクも同じように、ひっくりかえらぬしかけがしてあった」。これは据え置いて用いる行灯（あんどん）で使われるような油皿だと、動かした時に油がこぼれるからである。

そして、「あんどんの油燈蓋と区別するために、東北地方では、これをタンコロとも、また、タンコロリンとも」言い、関西では「ヒョウソク」と言われた。「これなどは確かにおどけた名前で、ロウソクのかわりになってひょうたんの形をしているからそれでヒョウソク、だれかがかわむれにつけたものが流行して、しまいには本名のようになった」としている。

しかし「ヒョウソク」という名前については、漢語に「秉燭」（ひょうそく・へいしょく）がある。もともとは燭を秉（と）る（燭を手に持つ）、火ともし頃などの意味であり、転じて手に持つ明かりのことなって、この灯火器の呼び名にもなったと、近年では考えられている。

いずれにしても蝋燭がまだ貴重であった時代には、このような菜種油を点す灯火器の工夫がされ、戦前までは各家庭でも使っていたようだ。

ひょうそく各種（江戸後期～昭和初期頃）

▼「火の今」を考える

柳田の『火の昔』によって、先人の灯火に対する工夫を知ることができるが、現代にあっては先人の苦労に感謝するとともに、昔の灯火の「失われた大切なもの」の再発見も必要だと思われる。

現在の普段の暮らしの中には、「火」の灯火は少なくなった。しかし、その長所は多い。例えば、色豊かで暖か、ゆれる・ゆらぐ美しさ、明るすぎない等、さまざな長所が考えられる。しかし最も大切なことは、昔の灯火は空間に明と暗の領域を作り出し、全てを曝（さら）け出さない灯火であったことだ。何故（なぜ）ならば、夜の闇と昔の灯火のこの特質による関係が、安らぎはもとより暗さに対する畏怖の感情など、人の心にさまざまな影響を与えてくれたからである。

柳田は『火の昔』の冒頭で、夜の闇は「すべてのものをかくし、静かに休むのには適しているが…」と書き出しているが、現代の夜は真の暗さが無く、それは心静かに休むことが難しい時代だということでもある。

また、柳田が指摘するように、かつての時代は夜の闇の中では何も見えず「村や屋敷の中までが別世界になって、何かよそからそのやみにまぎれて、近寄ってくる者があるような不安をいだくのが、普通」であった。また屋内であっても、火のある囲炉裏（いろり）のまわりは明るくても、光の届かぬ周辺はまさに見えない世界、「異界」だったに違いない。

一方、現在は屋内・外ともに暗さに対する不安がほとんど無い。

さらに現代は、暗闇が無いだけではなく、日暮れ時の微妙な光のうつろいも感じにくい時代である。かつては文字通り日暮れ時が一日の境であった。それは現代のように、家々に煌々（こうこう）と電灯が点されなかった時代には、より実感されていただろう。

日暮れ時は、「誰（た）そ彼時」「彼（か）は誰（たれ）時」と言われるように光のおぼろな薄暮の時間帯で、この一日の境の不安な時間帯に神隠しなどの不思議なことも起きると考えられていた。日暮れ時を「逢魔が時」とも言う所以（ゆえん）だ。

しかし実はこの「不安」という感覚、暗さに対する畏怖（いふ）の感情が大切であり、ここから人の心に多様なイメージが広がり、目に見えない聖なるものの存在を感じたり、妖（よう）怪をはじめとする怪異の伝承が生まれるなど心豊かな多くの文化が生まれてきたのではないか。

夜の暗闇もなく一日の境目も明確でない現在は、異界の気配を感じることができない。いわば神も妖怪も住めない明るすぎる空間、人間の現実世界だけが広がっており、人の心に豊かな情緒も育まれず、また安らぎもない不毛の時代だといえよう。

▼心やすらぐ灯火とは

筆者のかつての記憶の中に、美しい灯火の情景がある。

まだ田んぼや畑が残っていた昔の下町。冬の短い陽が落ちたころ、古い家並みが続く一角の粗末で小さい障子窓に、裸電球の赤みを帯びた灯火が映っていた。辺りは闇で、わずかに漏れた明かりが簀貫（わらぶ）きの屋根を照らしている。遠くで町のざわめきを感じるだけで、そこには物音ひとつない。

しかし、ご飯をよそう音、仲睦（むつ）まじい話し声も聞こえるような、しみじみとした温かい明かりであった。暗くて寒い冬であったが、一つの火を囲んでいるであろう家族の和（なごや）かなひと時が感じられて、今でも懐かしさを感じる。

部屋の一部だけを照らす灯火は、心が落ち着くことはもとより、一つの火を囲む楽しさがあり一体感も生まれる。それは例えば、停電の時に点したロウソクの周りに皆が集まった時に感じる明かりの美しさ、楽しさを考えれば理解できるのではないか。

人の心を豊かにするのは、やはり人の息遣いのように揺れ、全てを曝（さら）け出さない灯火である。目に見えない異界を感じることのできる、またこちらの世界では心安らかに過ごすことのできる灯火を新たに工夫することによって、豊かな心を取り戻したいものだ。

＝この項おわり＝

（奈良民俗文化研究所研究員）